
ガラスの靴を回収し隊

雪月花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガラスの靴を回収し隊

【Nコード】

N1827N

【作者名】

雪月花

【あらすじ】

【ガラスの靴を脱ぎ捨てて】の番外編集。

本編【ガラスの靴を脱ぎ捨てて】は、異世界に落ちた女の子がそこで出会ったゴールデンレトリバーとともに頑張る、シリアス系バイオレンスアクション恋愛ファンタジーです。

こちらはコメディタッチのお話ですが、本編に登場する、クールなユリジェス殿下のイメージを大切になさりたい方はご注意ください。いませ。

1 ピンクとグリーンの会話 小川のほとりにて（前書き）

本編ではまだあまり活躍の機会がないユリジェス様の噂話。

本編【ガラスの靴を投げ捨てて】の【プロローグ - ユリジェス side -】に關係するお話です。

マリーイに出会う前のユリジェス様です。

1 ピンクとグリーンの会話 小川のほとりにて

「ななな、相棒。おまえ絶対に短髪にしない方がいいぞ。ピンクの髪が肌に馴染みすぎてハゲに見えるから！ んでさ、ユリジエ様って殿下方の中で一番もてるよな。なんであんなに無愛想なのにもてるんだよ！ やっぱりあの銀髪のせい？」

「僕の髪のこととはほつといてよね！ 気にしてるんだから。ユリジエ様？ いやあ、あの無愛想さが、もてる秘訣なんじゃないの？」

「だってさ、俺達の女神、エリザベス嬢まで喰われたってんだぜ！ しかも次の日の朝、偶然会ったときには、何事もなかったかのようになされたってオカムリだったとよ！ それでも忘れられないって、あの方しかないのにつて、三日三晩泣いてたつて、女神様がだぜ！ そんなの普通ありえねーよな！ （息切れ）」

「あ、あのさあ、そんな話、どこから聞いてきたの、君？」

「決まってるだろ。エリザベス嬢の侍女、ルチルちゃんからだよ（照） すっげー可愛い。他にも聞いたぜ。ユリジエ様の好物は脚のきれいな女だとか、ベッドシーツはシルクよりもダブルガーゼ派だとか」

「ね、ね、ちょっと君……あんまりそんなこと言いふらしていると、不敬罪で捕まっちゃうよ」

「大丈夫だ！ ここは誰もいない小川のほとり。それに、こんなことと言えるのはおまえだけだからな。なにより、俺はユリジエ様が大好きなんだ！ かっこよさは俺といい勝負だし、女の好みもそつ

くりだし、いつかユリジェス様のようにクールな男になれるよう、
こうやって研究してんだよ。期待してろよな」

別にわたしは、脚で女を選んではいけないのだから。まあ、誰
だっていいんだ。

冷たいシルクよりダブルガーゼが好きなのは事実だが……
それより、グリーン頭、わたしの研究なんて楽しくないぞ。頼むか
らほっといてくれ。

2 ピンクの独白 野営地にて（前書き）

本編【ガラスの靴を脱ぎ捨てて】？第十四話 ユリジェスの側近たち
に関連したお話です。

2 ピンクの独白 野営地にて

はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、
はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ………

なんだって僕たちは、朝っぱらからこんなに走らされてるのでしょう。

「化け物ではない人間が、まだ生存している可能性がある。直ちに救助せよ！！」

ユリジェス様、直々に下された命令で、僕たちは夜通し村中を搜索させられるし

（真っ暗で何にも見えないよう！）

朝日が登ったら今度は、昨日よりもさらに範囲を広げて雑木林を搜索するように命じられた！

（あの小川のほとりよりも、もっともつと向こうだよ）

昨夜から今日にかけて、僕らはユリジェス様に殺されるんじゃないかと思っただ。

始まりは昨日の夕方のこと。

僕たちは、火から逃れた狂人を捜して小川の周りを搜索していた。結局何も見つけれず、ユリジェス様の噂話に花を咲かせながらシルバ村に帰ったとき、村に到着されたばかりのユリジェス様が、なぜか、青筋立てて怒り狂っていたのだ。

まさか、相棒とユリジェス様の噂話をしたのがバレたの！？　なんて、戦々恐々としたけど、どうやらそうではなく、指示書に深刻な誤りがあったらしい。

「村中を焼き払え」という指示書はユリジェス様の書いたものではなかったというのだ。

稚拙な作りの指示書を書いたのが誰だったのか、僕たち下っ端にはわからないけれど、それを不審に思わず、確認もとらず、素直に村を焼いた僕たち部下に対して、ユリジェス殿下の怒りが炸裂したのだ。

ユリジェス様の怒り……それが、【夜通し続いた村の搜索】と【夜明けから始まった雑木林の搜索】の”理由”というわけ。

……夕方になって、ヨレヨレのボロボロになった僕と相棒が、ようやく野営地に戻ってくると、初めて見かける少年が歩いていた。痩せこけてるけれど、でもどこか可愛らしい少年だと思う。

そしてなんと、その少年は、ユリジェス様の天幕に入っていくではありませんか！

衝撃的現場を生で目撃したそのとき、隣をチラッと窺うと……呆氣にとられ、その場に立ちすくむ相棒の顔したら、もう……

「ややや！ 誰なんだ、あの坊やは。なんでいきなり殿下の天幕へ？ まさか、ユリジェス様の恋人とか言っちゃったりしちやったりして！？」 やっぱりの説は事実だったのか！？」

その夜、疲れているはずの相棒が、ユリジェス様の男色疑惑について、ひとり盛り上がっていたのは言うまでもない。

ひとこと言っておくが、わたしには少年を愛でる趣味はない。

あまりにも、わたしが女性を寄せ付けないからだろうか、以前もそんな噂が流れたことがある。

わたしが美姫と浮き名を流すようになったのは、その男色疑惑の流布がきつかけだった。

ああ、そういえば、こう問われたこともあったな。

「殿下を慕って押しかけ騎士となった、グリーンの髪の少年とは、今も親密にされているのですか？」と。

迷惑な話だ。

3 グリーンは見た！（殿下と子犬） 村と野営地の狭間にて（前書き）

本編 第十話 邂逅 - ユリジエス side -

に関連したお話…… っていうか、部下の視点から見ると、同じ出来事でも、全然違う解釈となっております。

ユリジエス様、ご愁傷様です。

3 グリーンは見た！（殿下と子犬） 村と野営地の狭間にて

「ああ、君、まだ村の搜索は終わってないというのに、いったいどこへ行ってたの？」

「あ、あ、あのな！ 今な、俺、すげーもん見ちまったかもしれねえんだよっ！ つ、つまりな、そのな」

「ね、ねえ、ねえ、ちよつと君、大丈夫なの？ まだ夜は始まったばかり。僕たちつてば、朝まで村の搜索しなきゃいけないんだよ。瓦礫をひっくり返してでも生存者を捜さなきゃいけないんだよ。わかってる？」

「ああ、うんうん、そのことなんだけどな！ ユリジェス様は村の人間と、できたら金色の成犬を捜すように言ってただろ？」

「うん、そう仰せだったね」

「でな。俺、見つけちゃたんだよ、その金色の犬を」

「えええっ！？ 本当かい？」

「うーん、だけどな。その犬、子犬みたいにちっちゃいんだよ」

「んー、じゃあ違う犬だったのかもねえ」

「そこでだ！ 俺、その犬の後をつけたって訳だ」

「犬の後を？ ついて行っただの？」

「そうそう。そんでな、そいつ、村の片隅から何か変なものを拾ってきてんだよ」

「それって何だったの？」

「それが、さ……」

「どうしたの。君らしくない」

「いや、それが。透明でよく見えなかったんだよなー」

「……………ふーん」

「おお、それよりも、だ！ ユリジエ様が村の外に偶然いてさ、その犬としゃべってみたいなんだよな」

「はあ？」

「ユリジエ様さ、あの子犬に突然飛びついたり、見つめ合って話してたかと思ったら、ふたりして右に左に首を捻りあってたんだよ！ その後、子犬に逃げられて、ガックリうなだれてたし……」

「……………」

「ユリジエ様ってさ、ただ者じゃないとは思ってたけど、実は、犬と交流できるんじゃないかな？」

「……………」

「おい、コラ、相棒、俺の言うこと信じてねえだろ」

「……あのね、君。あのクールでめったに笑顔も見せないユリジェス様が、自分から子犬に飛びついてじゃれあったり、見つめ合って首をかしげたり、挙げ句の果てに、子犬に振られて落ち込むだなんて、誰が信じるっていうのさ」

「……………だよなー。実は、俺も、自分で自分を信じられないんだよ」

「はあ。もー、いいから。さっさと搜索を続けようよ。ね」

おい、グリーン、あの場面でおまえはいったい何を見ていたんだ？ おまえの頭は飾りもんなのか？ 切り落として振ったら、さぞかしい音がするのだろうよ。

4 エリザベス嬢の独白 夢の後（前書き）

本編 プロローグ - ユリジエス side - （ユリジエス視点）

番外編集 ピンクとグリーンの会話 小川のほとりにて（
部下視点）

番外編集 本作品（エリザベス嬢視点）

全て同じ夜の出来事についてのお話ですが、それぞれ違う視点から読むことができます。

どんな順番で読んでも大丈夫です。

4 エリザベス嬢の独白 夢の後

愛しています。ユリジェス殿下……

冷たい紫紺の瞳に、少しだけ薄いけれど柔らかそうな唇。繊細な顎のラインに、しっかりした首筋。ともすれば、女性的とも言われそうなお顔とは裏腹に、全身バネのようなお身体はたくましくて……

ほら、すれ違う瞬間を想像するだけで、わたくしの胸が高鳴ってしまっわ。徐々に近づいていくと、こんなに彼の胸板が厚く、力強いのがわかる。わたくしの目の高さにある、がっしりした肩にすがりつきたい。

朝議に向かうお姿は、朝日を浴びて眩しいほど輝き、流れる銀の髪を指で触れなくなるの。

悔しいけれど、女性はみんな、あなたに釘付け。

その見目麗しいお姿も、優雅な立ち居振る舞いも、全てに目を奪われる見事なお方。

ああ、昨夜のユリジェス殿下は本当に素敵だった。

激しく求められて、切なく酔わされて……

はあ……

あんなの初めてだった。

高貴なお方なのだからと近寄ることもできなかったけれど、来る者は拒まず、という噂は本当だったのね。

いいえ！　もしかしたら、わたくしだからこそ、あんなに情熱的に抱いてくださったのかもしれない！

ふうう、……今夜も夢を見せてくださらないかしら。

艶めいた視線も、力強い腕も、繊細な動きをする指先も、あの方の全てはわたくしのもの。

ほら、こっちを見て。わたくしはここにいるわ。

この熱い想いを視線に込めて送るから。どうぞ、受け止めてくださいな。

ねえ、わたくしの殿下。

ちょ、ちよつとルチル、何よその目は！

いいのよ！ 殿下にすぎなくされても、絶対に諦めないわ。わたくし。

ええ、わかってるわ、今すぐお父様にお会いしてから町に出るのでしよう？

あら！ そうよ、そうだわ！

今夜あの方をお迎えするために、新しいナイトドレスを用意しようかしら。

そうと決まったら、チャツチャと行くわよ。ルチル、わたくしにぴったりのものを選びなさい。

.....はあ。

また、つまらない者を抱いてしまった……

4 エリザベス嬢の独白 夢の後（後書き）

これにて、編集作業は終了です。以前のものと内容は変わってません。

これから本編も手直ししていこうと思います。パソコンが使えないため携帯で作業してありますが、たまに割り込み編集がうまくいかずグチャグチャになるので、プロローグ部分から順番に編集 随時アップしていきます、その後で編集前の話を削除していこうと思います。

それから、こちらの番外編集は、編集とともにタイトルもコメディ風に変更しました。

ご迷惑をおかけしますが、今後とも宜しくお願いいたします。

5 ピンクの幸せな夜（前書き）

本編？第十七話 真実の中に、少しの嘘

「自分だけ、なぜできない」と、ひとり悩んだユリジェス様。

5 ピンクの幸せな夜

- - 今夜も良い天気。2つの月がキレイだなあ。

暑い日中と違って、涼しい風の通り抜ける夜は、ひとりで散歩をするのに最高だ。明るい月明かりが、昼間のようにくつきりとした影をつくる。これは、2つの月が出てる間にしか体験できない。

そびえ立つ山の輪郭が、僕の足を止める。夜空に浮かび上がるその光景は圧巻で、しばし見とれていた。

ここは野営地。そして僕はその外れに立っている。すぐ横には、しーんと静まり返ったいくつもの天幕。これらの中に、たくさんの騎士や兵士が眠っているなんて、信じられない。

彼らは、昨夜と今日と、行方不明者の搜索や事件の捜査で疲れきって、きつと今頃、泥のように眠っていることだろう。

僕もそう。すごい疲れてる。だけど、体はヘトヘトなのに夜の野営地をこうして歩いているのは、異常に興奮した相棒がひとりうるさくて眠れないからだ。

頭の上で両手を組み、んーっ、と伸びをした。

- はああ、気持ち良い夜。

それにしても、さっき見た少年は、いったい何者なんだろう。相棒の言うような、ユリジェス様の恋人だなんて、とても思えないけど……

- あ、あれ？ ユリジェス様？

見つからないように、僕は素早く身を隠した。相棒と行動をともにしていると、鈍くさい僕でも気配を消すくらいお手のものとなるのだ。

ユリジェス様は、ひとり、大きな岩に腰掛けていた。長い脚を少し曲げ、体の後ろで岩に両手をついて、わずかに上を向いた横顔が、少しだけ憂いに満ちていた。

ユリジェス様が向いているのは、シルバ村の跡地。

……あれほど必死なユリジェス様を見たのは久しぶりだった。シルバ村は、きっとあの方にとって特別な場所なのだろう。

ユリジェス様が、身を起こした。月明かりに銀の髪が輝いて、なんて……見事な。

このようなユリジェス様を独り占めできたのだから、相棒に感謝しなければならぬ。

うつとりと見とれていた僕は、ユリジェス様の口元に、微かな動きを見つけた。……なにか、つぶやいている？ それとも祈りを捧げているのだろうか。

静かに時間が流れる。

こうして僕は、強くて美しい奇跡の申し子、ユリジェス様との幸せな夜を、天幕の影に隠れてひとり噛み締めていたのだった。

マルイ マルイ マルイ ……どうも違うな。

マリ、エ マリ、エ マリ、エ……

わたしが名を呼ぶと、あれは微妙な顔をするのだ。名前をちゃんと呼んで、早く喜ばせてやりたいのに、なぜ上手くないのだろう。

夜も更けたが、よし、もう少しだけ練習しよう。

6 グリーンの自業自得な夜（前書き）

本編？第二十三話 王都エメレム
に、ちよっただけ関連のあるお話です。

6 グリーンの自業自得な夜

俺の相棒には、妹がいる。のんびり屋の奴と、血が繋がっているのが何かの間違いじゃないかと思うほどの、チャキチャキした女の子だ。

奴より少しだけ紫がかったピンクの髪は、毎晩の念入りなブラッシングのおかげでいつも艶やか健康的だ。サッパリした気性のくせに、綺麗に結い上げたその髪と、意外に色っぽいうなじが彼女を女らしく見せている。

二十一歳の俺たちよりも、四歳も年下とは思えないほどしっかりしているのが、奴の妹、レイチエルだった。あれで十七歳だなんて、冗談だろ？ 絶対に詐欺だぜ！

そんな彼女が、今、王都エメレムで就職活動をしているらしい。

相棒とその妹の実家は、王都エメレムから馬で十日ほどの距離にある、カーシュを領地とする田舎貴族だ。

別に生活に困っている訳ではないが「どこぞのドラ息子と結婚させられるよりも、王都で好きな男を見つけて伴侶としたい！」と宣言し、さっさと実家を出てきたという話だった。

そして近いうちに、女神、エリザベス嬢の屋敷へ面接に来ることになっている。さすがにそこまでは、妹ラブの相棒でさえも知らない話だった。

なんで俺が、妹の予定まで知っているかというと、それはもちろん、脚の綺麗なルチルちゃんからの情報だ！

先日 of 不可解な惨事が起きる前、俺たちの部隊はシルバ村にほど近い演習場で、特別訓練を受けていた。そのときに受け取った彼女からの手紙に書いてあったんだ。「あなたの相棒の妹さんが侍女の面接を受けに来るのよ。気位の高いエリザベス様に気に入っていただけか、ちよつと心配なの」って。

壊滅した村の後片付けが終わり、今朝シルバの野営地を出発した俺たち一行は、明日中には王都エメレムに到着する。

着いたらすぐに会いに行こう！

久々にルチルちゃんと過ごすんだから、夜明けまであんなことやこんなことをして、絶対に彼女を眠らせないつもりだ。ムフフ。

そうと決まったら、俺も早めに寝なくちゃな。疲れて使いもんにならなかつたら洒落になんねーし。

……つて、どわあああああつ！！

なんだよ、なんだよ！ いったい何が起こってるんだ？
なんだってユリジエス様とその側近の方々が無言で戦ってたよ

っ。

あっさり倒したはいいけど、その新人坊やはなんで目を覚まさないんだ？

うえええっ、たまたま近くで覗いていた俺まで事情聴取されんのか？ まさかそんな。

いやマジで、俺、こいつらとは無関係なんですけど。明日の甘い夜のために、今夜は鋭気を養うはずだったんですけどおー……

なんだ、グリーン頭か。こんな荷物置き場で何をしていた？

……まあ、よい。分かっているだろうが、今夜のことは、他言無用だ。

それから、さらなる襲撃に備えるため、今夜はおまえに、荷物置き場の警備をしてもらおう。

これも分かっているだろうが、わたしの小姓を起こすなよ。よいな？

7 レイチェルの受難（前編）（前書き）

本編 第二十六話 異世界の暮らし方の二ヶ月前のお話です。

今回から、ユリジェス様のボヤキがなくなりました（苦笑）

7 レイチエルの受難（前編）

残暑も厳しいある日のこと。重い荷物を抱えたわたくしは、日差しを避けるように木陰のベンチに座り込んでいました。

そこは『一の郭』の緑豊かな中央公園。目の前の噴水からは、細かい飛沫が吹き上がり小さな虹を作っています。なのに、わたくしの心にはそれを楽しむ余裕ありませんでした。と、いうのも……。

「はあ……」

わたくしには、忍耐というものが足りないのでしょうか？ 働き始めて一ヶ月。早くも堪忍袋の緒が切れたわたくしは、今朝、用意していた辞表を叩きつけて、エリザベス様のお屋敷から飛び出してきたのでした。

政略結婚を避けるため、旅芸人に同行をお願いしてエメレムまでやってきたというのに……。本当にもう、ため息しか出てきません。こうしていても仕方がない、とりあえず街へ下りようか……。と、重い腰を上げたときでした、酔っ払い男に絡まれたのは……。

男は、ベンチから立ち上がったわたくしの手首を掴んでいます。近くに人はいません。噴水の向こう側に談笑する二人の淑女が見えるだけで、彼女たちがわたくしを助けてくれるとは思えませんでした。

どうしたら良いのでしょうか。身なりだけは立派なこの男は、わたくしがどのように抵抗しても、手を振りほどくことができないのです。それどころか、「一発やらせるよお」と腰に手を回し、わたくしを引き寄せようとしてくるではありませんか。

安全なはずの『一の郭』内で、なぜこのような目に遭うのでしょうか。

う。泣きたくなつたそのとき、

「昼間から酒に溺れて何をしている。レディを放しなさい」

硬質な声にハッと顔を上げると、そこに立っていたのは、そびえ立つ山のようにがっしりした体躯の騎士でした。

濃い茶色の髪は驚くほど短く、燃えるような赤い瞳が男を威嚇しています。それでもニヤニヤした男がわたくしを放さずにいると、短髪の騎士様は、もう一度静かに警告しました。

「聞こえなかったか？ 彼女を放せと言っている」

次の瞬間、騎士様が動きました。わたくしの体を抱き寄せる反対側の腕に、続いて首の後ろに、鋭い手刀を叩き込んだのです。いつの間にか、男は剣を握っていたのです。

運命のお方。ああ、やっとめぐり逢えた……と、胸ふるわせるわたくし。

そこへ、小姓姿の少年が声をかけてきました。

「間に合つて良かった。怪我はないですか？」

「は、はい。助けてくださつてありがとうございます」

わたくしよりもずっと幼い印象の少年は、金色の毛並みが美しい犬を連れていました。彼は地面にノビている男をつついて、騎士様を見上げます。

「お疲れ様でした、マイオスさん。ところで、この人どうします？」
「走る馬車から飛び降りたときは驚いたよ、マリイ。もう二度とやらないでくれ、こんな無茶は」

「あはは、ごめんなさい。でも、この子が困ってたからさ」

「……………」

「悪かったってば、マイオスさん。ごめんね。でさ、これ、どうしようか？」

「……………」公園の外に放り出してくる。そのうち警備兵が見つけてくれるだろう」

その後の自己紹介で、お二人がユリジェス王子殿下の直属の部下ということがわかりました。

なんとという偶然なのでしょう。わたくしは、ユリジェス様の執事であるアルバート様に、昔からずいぶんとお世話になってきているのです。今回、家出したときもそうです。エメレムに着いて一番最初に相談に乗っていたいたのが、アルバート様でした。結局、仲の良いルチルの働くお屋敷に採用されたのですけれど、今度こそは、アルバート様が懇意にされているお方のお屋敷へ面接に行くつもりです。

明るい希望と全財産を詰めたバッグを胸に抱き、意気揚々と市街地へ向かったわたくし。その夜は、宿屋の一階で美味しい夕食をいただく、マイオス様の夢を見ながら幸せな眠りについたのです。

その翌日から、わたくしの身の回りに次々と異変が起きるようになるのですが、まさか、あの日出逢った小姓のマリイ様が全ての原因だったとは、このときのわたくしには、想像もつかないのです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1827n/>

ガラスの靴を回収し隊

2010年10月9日23時44分発行